

ゆうかり放送委員会提供

# ゆうかりに乾杯

第40回放送の概要 (2011年10月22日放送)

## パーソナリティ

さくら (安本久美子)  
タロウ (佃 由晃)  
なかちゃん (中嶋邦弘)

## コアラさんの地域瓦版

アコちゃん (三木文子)



## ミキサー

門ちゃん (門田成延)  
一ノ瀬悟

## 相談役

わだかん (和田幹司)

## 会計

小山俊則

(CM)「7つ 8つ 9つ とう といち」でおなじみの「十一の奈良漬」は、「灘の生一本」の酒粕に漬け込み仕上げた自慢の味です。食事の締めくくりに、サンドウィッチや巻寿司などにも御愛用ください。今日は、「十一の奈良漬」黒田食品さまの御協力を頂きました。

## 1. オープニング

阪神大震災の最初の縦揺れは、当時神戸には地震は起きないと思っていたので近所で爆発があったように感じ、その後の横揺れで食器が飛び出して初めて地震と認識した。石油ストーブを消すということも思いつかなかった。今日のゲストは防災の専門家です。詳しくお話を伺います。

## 2. ゲストコーナー: 兵庫県立舞子高校環境防災科 諏訪清二先生、3年生の宮辻知見さん、浜友貴さん、猪口陽名さん、環境防災科第1回卒業生岸本くるみさん

全国で唯一防災を専門に学ぶ舞子高校は今年創立10周年を迎え、8月29、30日に今まで取り組んできた防災教育と全国の先進的な防災教育の総括と東日本大震災の被災地、岩手、宮城県の中学生、高校生からの報告を受け、今後の防災教育の在り方を考える「防災教育全国交流大会」を開催した。

2002年4月にスタートした環境防災科発足のいきさつは、簡単に言うとトップダウンで決まった。防災の学科を作りたいという県の意向があり、舞子高校にしようということになった。その背景は兵庫県全体が今までの防災教育ではだめである、避難訓練だけでは阪神淡路大震災では役に立たなかった、もっと大事なことを教えようということで、人々が助け合ったり思いやったりしたこと、人の命がどれほど重たいかを知らされ、そのことをきちんと伝えて行こうという防災教育を続けてきた。5年目あたりから高校に導入できないかという話があったこと、当時高校は偏差値をもとに行ける学校に行くという風潮であったが、行ける学校から行きたい学校を作ろう、すなわち多様化し、いろんな学科を作る中で防災教育を活かしたものを作ることになり、舞子高校に作るようになった。生徒数は当時1学年8クラスのうちの1クラス40人である。全県から40人となっているが実態は通学出来る範囲から来ている。環境防災科の授業内容は、商業、工業学校が、専門科目が1/3、普通科目が2/3となっており、これらの学校と同じように、防災の専門科目1/3と普通科目2/3である。文部科学省の学習指導要領では防災の科目が少ないので先生が手作りの学校設定科目を作った。前例がないので大変だと思わず、自由な考え方で授業内容を作りあげた。

岸本さんは第1期生のため応募するのに躊躇はなかったか聞いてみた。中学に案内が来ており面白そ

うと思ったので夏休みに体験学習に参加した。先生による模擬授業、外部講師が多いこと、震災の様子をまったく知らない人と5分間の自由討議などがあり、これまでに体験をしたことのない新しい授業が受けられることがわかり環境防災科を希望した。

先生が防災の素人であることを補完するため外部講師として、震災にかかわった大学の先生、NGO、NPO、行政、消防、警察、レスキュー犬などを取り入れた。

地元長田出身の浜さんの好きな外部講師は、阪神淡路大震災で自宅が半壊し、祖父母の家が全壊したので水道局の人で、震災の話を詳しく聞くことが出来たので心に残っている。宮辻さんの場合は盲導犬は知っていたがレスキュー犬は知らなかったため、実際に生徒が箱の中に隠れているのを探し出したのを見てすごく印象に残った。

授業の中では長田の町歩きを行い被災された方の話を聞いたりしている。猪口さんは西区のため被災の状況は違ったが、長田の町歩きで印象に残ったことは火災が発生したことで自分の家が焼けたり、近所の方が火災で亡くなったりした話を聞き当時の状況がとてもよくわかったことである。

舞子高校のHPに掲載されている「語り継ぐ」は生徒一人一人が震災の体験ないし親などから聞いたことを綴ったもので、これまでの卒業生の文章がすべて閲覧できるようになっているのは大変素晴らしいことである。学校としては出来るだけたくさんの人に読んでもらいたいと考えており、実際小中学校の授業で使われている。小学生に震災を大人の視点で語ると伝わりにくいが、小学2年生に小学2年生の体験を語れば入りやすい。岸本さんは小学2年の時は被害の大きい会下山に住んでいた。家族や家は無事だったが家族の一員の猫がマンションから落ちた。息があったので母と姉が火事と地割れの中を動物病院まで運び注射をしてもらったが死んでしまった。

語り継ぐは同世代の話を伝えること、大人の話は伝わっているが子供の話をもっと伝えたい。今の7、8、9期生になると自分がどれほど親に守られたかを親に聞き書きするという目的がある。

岸本さんは舞子高校卒業後、防災専門コースのある神戸学院大学に進み、その後JICA青年海外協力隊として中米のエルサドバドルでボランティア活動をしてきた。四国程度の大きさの小さな国である。環境が随分違うので食べ物など苦労した。また街を歩いていると強盗がバイクでやってきて静かにしろ、金を出せと言われ1ドルを差し出した。現地では防災隊として市役所の危機管理の人と仕事をし、防災訓練の手伝いをしてきた。10年前に大きなエルサドバドル地震があったが今は洪水、地滑りがあり現在も水浸しになっている。

### 3. ミュージック : ZABADAK 「ワンダフルライフ」

劇団キャラメルボックスの坂口理恵さんが勧めてくれた曲で、東北応援無料ツアーの「賢治島探検記」という路上でも出来るお芝居を考えて、その時に使った曲です。スマップの吾郎ちゃん他の歌手もカバーしています。すごく大事な人が亡くなった時に作った曲という噂があるが、それでもワンダフルライフというタイトルをつけたのがすごいと思います。

### 4. ゲストコーナ (2) :

我が家の防災対策について、浜さんの家では祖父母の家が全壊したが梁を太くしていたお陰で横の家に挟まれたので助かり、その後全壊になったので、自分の家も耐震補強しつぱり棒で家具を固定している。

東日本大震災のボランティア活動については、学校としては4月の頭の6、7、8日に1回目、4月27～30日に学校交流で2回目、3回目は5月7日～6月3日までの4週間に環境防災科の3年生、2年生、1年生、普通科でそれぞれチームを作り、各チーム1週間、合計4週間のボランティア活動をした。夏休みに入り7月25日～8月1日に宮古、釜石、気仙沼、東松島を1週間、8月9～12日は現地は1泊2日の弾丸ツアーを神戸学院大学と一緒にいった。そして8月17～21日にも活動した。多い生徒は3回くらい行っている。

猪口さんは5月に東松島に行き普通の家でボランティアをさせてもらった。裏庭の倉庫に溜まったヘドロを掻きだす仕事で、スコップなどでヘドロを土嚢袋にひたすら入れた。一日ではなかなか終わらない仕事だった。その時家の方がつらい話をいっぱいしてくれたが、自分にはつらい思いが十分理解出来なかったのがくやしかった。宮辻さんは5月に東松島でいろんな家でお手伝いしたが、おじいさんおばあさんの家では、初めは話が全然できなくて無言で片付けをしていた。昼食時頃にはしゃべってくれるようになり、震災発生時の話を聞いたり娘さんや孫の話も聞き、そのうち先方がどんどん笑顔に変わって行くのがわかった。帰る時に、次は来られない状況だったのでボランティアはいりますかと聞くと、あなたたちが来られるなら来てほしいが、来られないなら別の人はいらぬと言われとてもうれしかった。先方は自分たちが孫と同じ年代であったこと、孫は男の子がほとんどで女の子がいなかったことから、ご自分の孫とかぶっていたと思う。帰りには兵庫県の孫と言ってもらえた。浜さんの場合、猪口さん宮辻さんと同じ班であったが、ピアノの先生宅が一番印象に残っている。災害ボランティアは泥掻きが中心と思っていたが、その家は楽譜や写真を拭いてほしいと言われ、自分もピアノを習っているので楽譜の大切さがわかるので、女の子の得意な「拭く」という作業を自分もしっかり出来たことが印象に残っている。岸本さんは神戸学院大学の「あなたの思い出まもり隊プロジェクト」の手伝いをしている。泥をかぶったりインクが流れた写真をアルバム毎送っていただき、拭いたり水で洗浄しパソコンに取り込みデジタルで復元し送り届けている。いろんな思いが詰まった箱が被災地から送られてくる。

5月の後、再度7、8月にボランティア活動で行った時、5月にお手伝いさせていただいた同じ家を訪問した。夕方、お手伝いではなくこんにちはを言いに行った。

猪口さんは行く前に電話でそちらに行っていていいですかと聞くと、いいですよと言われ伺った。何うとお寿司、メロン、煎餅などを用意してくれていて気持ちがとてもうれしかった。5月に行った時忘れてほしくないの自分たちの写真をアルバムにして渡していた。宮辻さんもおじいさんおばあさんを訪問した。ボランティア最後の日に挨拶だけに行くと言っていたところ、先方は来るかもしれないと思いついておられたようで、その時結局会えなかったが息子さん夫婦や孫も待っていてくれたようであった。玄関を入ると自分たちが送った手紙が貼ってあった。家に上がるとおじいさんおばあさんには似つかわしくない自分のために買ってくれたと思われる甘いジュース、メロン、シュークリームが置いてあり、メロンはおばあさんの分まで頂いた。帰る時も車で送るのでぎりぎりまでおりなさいと言われ、お菓子を一杯頂いた。バスの中で一人ずつおじいさんおばあさんにありがとうを言いながら頂いた。

大川小学校の悲劇と釜石小中学校の奇跡について両極端の状況が発生しているが、我々はこの事実からどのような教訓を得るのかについて；

釜石は釜石東中学校と鶴住居(うのすまい)小学校が隣同士にあり、日頃から校舎ではなく高台に逃げようという訓練を中学校がしていた。想定は1階まで水没するが3階に逃げるのは駄目で高台に逃げる訓練をしていた。当日大揺れの後、隣の小学生が3階に逃げたが中学生は三々五々、津波でんでんこという言葉の通りでばらばらにグラウンドに出て走り出した。それを小学生が見て走った。走って逃げる小中学生を見て地域の人も走って逃げた。一時避難所に着いたがそこはがけ崩れがしかかっていた。おばあさんが怖いので逃げようと話したので次の場所に走って逃げた。30秒後に2m程の津波が迫っていた。結局最後まで逃げ切ることが出来たので奇跡だと言われているが、これは奇跡ではなく、きちんと訓練し、きちんと判断し、きちんと逃げた結果である。

大川小学校の場合は70人が亡くなり4人が行方不明になったが、ここは津波の想定区域ではなかった。子供、先生、地域の人でもグラウンドに出て多くの方は大丈夫だろうと思っていた。子供の中には山に行った方がよいと言った子もいたようだが、殆どの子供が亡くなったり行方不明になった。事実は良く分からないが子供たちが最後に避難しようとした時に、海岸から5km離れていたが津波に吞まれてしまった。先生の判断が遅いとか悪いとか色んな事が言われている。日本では津波が来ないところに地震が起きると、揺れが治まればグラウンドに出て点呼するマニュアルになっている。結局マニュアル通りにやっただけである。

教訓は2つある。想定を信じたことの失敗、想定は信じないことが1つ大きな教訓。もう一つはマニ

リアル通りに動くのではなく、想像を絶する揺れであればもっとすごいことが起こるかもしれないと言う感性を、教師も住民も、大人も子供も皆が持つべきである。それが今の教育では育て切れていない。とにかく知識を詰め込み大学に行けば良いというところがあり、もっと自然に対し畏敬の念を払えるような教育をきちんと作るべきと思っている。この二つが大きな教訓と思っている。

関西では今後、南海・東南海・東海3連動地震が予想されている。災害の規模は人口やインフラが東日本以上に集中しているので東日本を超えることが想定される。そのような事態に対処するために防災対策、防災教育はどのように見直すべきかについて：

南海・東南海・東海3連動地震は30年で60%、50年で80%の確率で発生が予想されている。その時代は今の高校生や我々の子供、孫の世代が社会の中心になっている。その時までには何かを残すのが我々世代のミッションと考えている。行政は想定を高くすること、行政は専門家の言うことと財政のバランスを考え金で手当てできる範囲内で動かそうとするが、それを超えてきちんと想定を出すこと。そのうえで行政では守りきれない、堤防を造るお金はない、造ってもそれを超えてくることを市民に伝える必要がある。市民の側は東北の惨状を見て、自分たちは頼り切るのは駄目である、一人ひとりが自然・地球・災害をもっと勉強し、まず自分で自分の命を守ること、同時に命を守れない人がいるのでそのような人々と日常的に繋がり、災害が発生すれば自助と共助が同時に出来るような日常の社会を作って行く必要がある。舞子高校の環境防災科としてはこれまでの取り組みを継続していけば良いと考えている。環境防災科の目的は専門家を作るのではなく、いざという時の市民のリーダーになることで、いざという時でなく日常的に市民の中に防災を持ち込んでほしいと思っている。それを舞子高校の生徒にはやってほしいと思っている。

#### 5. なかちゃんの「こぼれた話こぼれなかった話」

阪神・淡路大震災の経験を語り継ぎその教訓を未来に生かすため、その拠点施設として三宮の東、神戸製鋼所の跡地 HAT 神戸に2002年にオープンした「人と防災未来センター」があります。そこでは、

- ① 震災の追体験、記憶、防災・減災、水、こころに関する展示フロア
- ② 貴重な震災記録や防災などの資料を収集、保存している資料室
- ③ 地方自治体、海外からの災害対策専門職員を受け入れ、育成
- ④ 実践的な防災研究と若手防災専門家の育成
- ⑤ 国内、海外で発生した災害対応のために人材派遣、現地支援
- ⑥ 市民や企業、研究者、役所、国際機関の人達との交流ネットワークの形成などに取り組んでいます。

人防災未来センターは、西館と東館と別展示になっていて、展示場、こころのシアター、語り部講話、研究員によるセミナー、資料閲覧者、夏休み学校等イベント、災害対策特別研修などで、昨年度はトータル延べ年間約50万3千人以上の方が来場されています。

そのうち、団体申し込みなどで、来場者の特性が明確である利用者の区分をみると、大人が48%、高校・大学生が12%、小学生・中学生が40%の割合でした。ところが今年は、3月11日の東日本大震災を切っ掛けに、5月頃から月別来場者が114%~134%と急増しています。これは、一般的な震災・防災に対する意識が高まったこともあり、小学生・中学生・高校生たちに対する災害教育の重要性が認識されての団体来場が相次いでいるからです。しかも、高校生のバスを連ねての修学旅行が目立ち、昨年度より約10%弱増加しており、小中学生にいたっては入場無料ということもあり、団体でない把握が難しいので、対前年比30%以上伸びており、実際の比率40%はもっと高いのではないかと推測されています。ちなみに、来場者の地域をみますと、1位兵庫県内は当然として、2位大阪府、3位海外から（これは、中国、韓国、マレーシア、台湾、タイ、インドネシアなど近隣諸国が多い）、4位愛知県、5位香川県、7位和歌山県です。

人と防災未来センターでの高校生たちへの特別イベントとして、1. 17防災未来賞、いわゆる「ぼうさい甲子園」が毎年開催されています。災害・防災に対する自分たちの活動内容を発表して優秀な取り組みを表彰しています。これには、小学生の部、中学生の部、高校生の部、大学生の部と分かれています。



て、全国から100以上の学校から応募があり、それぞれ、「ぼうさい大賞」「優秀賞」「奨励賞」などが交付されます。今日ゲストにお迎えしております県立舞子高校は、第1回目の2005年に「優秀賞」、次いで2006年に「ぼうさい大賞」を受賞されました。また釜石市立釜石東中学校は昨年優秀賞を受賞されている。地域や学校の取り組みが素晴らしいということが今回の津波に対する良い結果に繋がったと思われます。

諏訪先生や生徒さんの研鑽のおかげで、防災教育が急速に広がって、実際の取り組みが功を奏することが明らかになっています。今後、ますますのご活躍を期待しております。

#### 6 ゆうかり大好きコアラさんの地域瓦版

来週日曜日(30日)第7回神戸・新長田鉄板こなもん祭が13時~15時、新長田南地区商店街で開催されます。そばめし大食い選手権、お好み焼きスタジアム、グルメ屋台が出ます。70年代のフォークを素人さんが2曲づつしませんかなどが鉄人広場で行われます。同じ日に多文化交流フェスティバルが生田川公園で開催されます。時間は11時~15時です。ステージイベントは中国の獅子舞、朝鮮舞踏、民族衣装ファッションショー、各国の料理屋台、アジアの遊び体験コーナーなどが計画されています。

#### 7. エンディングトーク

生徒さんの卒業後の進路について、浜さんは阪神淡路大震災の時高齢者がたくさん亡くなり、自分も高齢者が多く住む長田に住んでいるので、高齢者の方が安心して生活できる社会づくりに携わり、学んできた防災を伝えて行きたい。宮辻さんは阪神淡路大震災の時、たくさんの方が避難所に行ったが、子供の親が生活のため仕事をしているので、子供の心の傷まで目が行きとどかなかった話を聞く。今でも近くの人で何も無いのにこけたりする人がいる。これからの災害や今までの災害で、たくさん心の傷を負う人がいると思うので、そのような人の心のケアをしたいので心理の勉強をしたい。猪口さんは中学校の時から養護教員になりたかったので、環境防災科で学んだことを生かしてこれからの時代を担ってくれる子供たちに防災教育も含めて心理カウンセラーをしたい。

岸本さんは防災と関わり、世界に出て毎日の暮らし、一瞬一瞬自分が生きていることがすごく幸せに感じる事が出来るようになったので、これからも皆で楽しい幸せな暮らしや世界を作って行けたらいいなと思っています。

#### 8. 来週のゲスト

似顔絵を描いておられるフロッグ西嶋さんにお越しいただきます。

番組に対するご意見、ご感想はこちらまで：[yuukarinikanpai@gmail.com](mailto:yuukarinikanpai@gmail.com)